

高齢化の進行に対応した 学校と教師の新たな在り方を求めて

静岡大学教授

馬居 政幸

はじめに

① 「指導力不足の教員 特別研修で再教育、改善なければ退職勧告」

② 「教員の資質改善のため、効果的な授業を実践している教員に金銭的、人事面での優遇措置を講じ、逆に評価の低い教員に対しては教職以外への配置転換や免職が可能な制度改革を求めた。」

ともに昨年末（平成十二年十二月八日）、読売新聞一面の見出し。東京都教育庁が来年度から導入する制度について報じたのが①。この記事に並んで、「十八歳全員

の奉仕活動」との見出しにより報道された教育改革国民会議の最終報告案の概要から取ったのが②。多分、本誌が読まれるころには、平成十三年度予算審議で、文部省による制度の具体化が論議されているのではないか。

ようやく始まったか。これが私の率直な感想である。だがそれはマスコミ等を通じて語られる問題教師の存在故ではない。逆である。この十年、生活科、新学力観、総合的な学習の時間と、新たな授業の在り方を求めて先生方と共に研究を続けてきた者として、その努力に報いる制度がないことを懸念していたからである。

もう一つある。教師の高齢化である。制度変革にとつ

て最も重要なはその担い手。IT（情報技術）革命を代表に、新産業を担うのは若い才能。教育改革も例外ではない。明治も、戦後も、そして何よりも生活科から新学力観へと進む平成の教育改革もまたそうであった。だがそれは今過去になりつつある。早晚、少子化による新採で、教師の三人に一人、学校によっては二人に一人が四十代後半以上も珍しくなくなるからである。

もちろん、若ければ良いというわけではない。一つの学校にさまざまな年代の教師が互いに支え高め合ってこそ、未来を開く子どもたちの育成は可能。加えて、あえていえば若さは年齢ではない。問題は教育実践における若さである。新たな研修が要請される理由である。

他方、中高年の増加は、必然的にポスト不足を生み、従来のような昇進による評価を困難にする。改革へのインセンティブを高めるためには、新たな評価と報酬（金銭だけではなく）の在り方を問題にせざるをえない。

だが、それにしても教育改革への要請の多様さに比して、高齢化に関する論議が見えない。冒頭の記事にしても高齢化の文字はない。そこで四十代、五十代教師の増加に伴う課題についての私見を提示したい。

一 ネットワーク型経営システムに

その第一は教師の高齢化をプラスに評価する戦略。通常、統計的に高齢者とは六十五歳以上。更に今後は老年期のスタートを六十五歳から七十歳に変更すべきとの意見もある。六十代では自らを高齢者に位置づけることに抵抗感を持つ方が多いことが背景にある。

その意味で、教師の高齢化といっても四十代から五十代の教師が増加するだけ。肉体のエネルギーは二十代や三十代に劣るが、教師としての力量が最も高まる年代の人たちが多数派になると位置づけることも可能。

加えて、総合的な学習の時間を代表に、今後は日常の校務で学校外の多様な人や機関との連携が重要になる。子どもへの教育では若さのパワーが重要だが、学校の外との交渉では経験の価値が優位になる確率が高い。

また、子どもの教育においてもパワーだけでは対処できない問題がある。その代表が親との関係。現在の少子化は戦後二度目の現象、親もまた少子世代である。両親に期待され大事に育てられた子どもが親になり、初めて抱く乳児が自分の子という場合が少なくない。勉強中心

に育った男女でもある。子育てのノウハウを学習する機会がないままに親になった父母が大多数とみて間違いない。この親たちに家庭教育力の低下を非難することはかえって問題の解決を困難にする。既に幼稚園や保育園で試みられているように、これからの学校教育は子どものみでなく親子共に学ぶ世界として構想すべきである。これこそ経験を積んだ教師の出番である。

ただし、このような熟年教師の積極面を活かすには、学校経営を従来の校長を最上位におくピラミッド型システムから、個々の教師が自律して行動するネットワーク型システムに転換する必要がある。たとえ校長が上位者としての権限で集権的に指導力を発揮しようとしても、同年輩の教師が多数いる状況でどこまで機能するか疑問だからである。さらに、学校が地域を始め多様な分野に開かれることになれば教師への要求が多様になることを避けえない。また新教育課程のポイントは個々の子どもに応じた指導。いずれもキーワードは多様性である。その結果、学校全体の統一や学年単位のレベル合わせを優先する経営システムでは対応できない。加えて、学習者の多様性は教師の臨機応変の柔軟な支援によってこそ育

まれる。このような教育実践においては、教師個々の個性を認める一方で、自己責任の領域を明確にした自律型システムが合理的。さらに経営システムのレベルでは、教頭や各主任は担当する職務遂行に関わる教職員（必要に応じて学校外も含め）を相互に結び合わせるコーディネーターと考えるべきではないか。また、校長はそれらを全体として有機的に機能させるために必要な「ひと」、もの、こと」を準備するプロデューサーとなる。

この自律型ネットワークシステムが円滑に機能する前提条件は、教師の教育実践への評価のあり方。学習者による評価が組み込まれたシステムが課題。そのポイントは教師間の教育過程における情報公開である。

これは特別なことではない。新指導要領のもとで準備されている総合的な学習や開かれた学校づくりの推進を始めとする特色ある教育活動展開のための改革は、いずれも学級王国的システムでは有効に機能しないはず。また、「知識・理解」にかわって「関心、意欲、態度」を重視し、支援のための評価を強調する評価観こそ学習者による評価を組み込んだシステムである。

加えて、このシステムは地方分権と規制緩和の流れが

合わさった学区弾力化への要求とシンクロする。弾力化の意図は教師が強制的に教育するシステムから、学習者が自己のニーズに応じて選択するシステムに学校を転換させることにあるからである。

二 サービス業としての自覚を

教師の高齢化に対応した第二の課題は、現在四十代教師の新たな意識と生き方の醸成である。

上述したようなドラステックなシステム転換を要請する状況の変化に、高齢化の主体としていかに積極的に対応できるかが課題。その第一歩は現行のヒエラルキーシステムの上昇やその裏返しとしての生涯一教師という生き方に限定する自己評価観から自由になること。教師としての選択肢を多様な分野に拡大する生き方に挑戦し続けられるかどうかである。加えて、たとえ意欲は高くとも、過去の経験に固執すれば迷惑するのは子ども。未来に生きる人たちに過去の教訓では役立たない。

二十一世紀を生きる人たちへの教育には、やはりその時代を積極的に担うことが可能なエネルギーが不可欠。少ない若い教師が全力で活躍できる舞台をいかに用意で

きるかが、四十代、五十代教師の真の力点である。

そのためには、情報機器や異文化に挑むことで柔軟な思考と感性を培い、不断の自己学習で過去の経験をリニューアルし続けることが求められる。総合的な学習は、まず教師にこそ必要。そして最も重要なことは、教師としての自己認識を、多種多様な人たちの学びを支援するサービス業として位置づけられるかどうかである。

だが、これは教師、それも年齢と経験を連ねた教師にとつて最も困難な課題であることも明らかである。冒頭で紹介した、自己学習や自己認識の転換を支え援ける研修システムが求められる理由である。ただし、初任↓中堅↓管理職という年齢とキャリアアップが平行する研修システムは不合理。職階の上昇に代わる新たな評価（報酬）システムとセットになった仕組みが必要になる。

その第一歩は、受講者と講師双方に対する研修過程の優劣や研修効果の評価である。さらに、キャリアアップの効果によるインセンティブを期待できない以上、人事と報酬をセットにした日常公務全体に対する評価システムを積極的に適用することも避けえないことを、再度強調しておきたい。

特集

生きる力と体力

学校メッセージ

- 人情豊かな地域の中で……中央区立月島第一小学校
- 意欲的に学ぶ子ども……目黒区立下目黒小学校
- 下町情緒あふれる心豊かな一校……江東区立深川第二中学校
- 三十年を迎える島の高校……都立神津高等学校

子どもの詩 「ふぎのとう」

エッセイ 二〇〇〇

偶然の謎を考える

新潟大学教授/井山 弘幸

8

この人に聞く 「出会いのパフォーマンス・手話を通して」

丸山 浩路

12

特集 生きる力と体力

〈論 説〉

子どもたちの生きる力と体力

加賀美淳子

17

〈意 見〉 運動を通して育つ心と体力

■ 水に親しみ、水に学ぶ

長崎 宏子

24

■ 文部省育成モデル市町村

―総合型地域スポーツクラブの育成をめざして―

佐々木義雄

24

〈実践事例〉

- 体を動かす楽しさを味わう …… 竹内 浜江
- 運動の楽しさを味わいながら心と体を育てる …… 室井 敏明
- 活動的な生徒の育成を目指して …… 大竹 康夫
- 都立農業高校との交流授業 …… 川崎 栄

34

資料 「第18期東京都スポーツ振興審議会 答申」(概要)

50

学習指導 1 自分も相手も大切にする心の育成 …… 坂井 和人 52

学習指導 2 よい社会人の育成 …… 福岡由美子 56

連載 現代「経営」考 …… 小松 郁夫 60

二十一世紀の学校のリーダーシップ 国立教育政策研究所高等教育研究部長 小松 郁夫

教育情報コーナー

高齢化の進行に対応した

学校と教師の新たな在り方を求めて 静岡大学教授/馬居 政幸

64

あとがき

68



教育じほう

2

2001
No.637

特集 生きる力と体力



編集

東京都立教育研究所

FEBRUARY 2001

教育じほう 編集
東京都立教育研究所